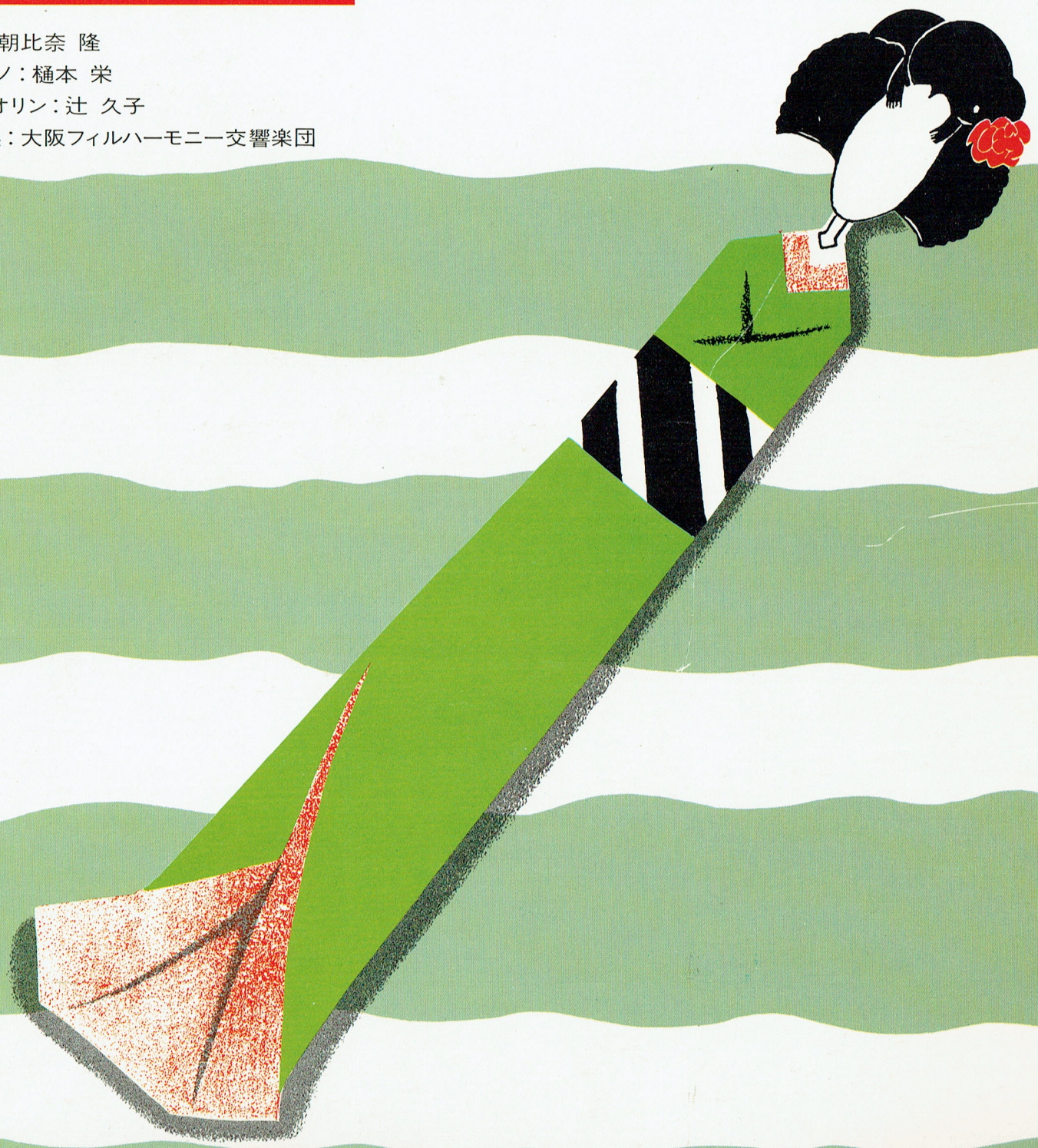


KOICHI KISHI

貴志康一

作品集

指揮：朝比奈 隆
ソプラノ：樋本 栄
ヴァイオリン：辻 久子
管弦楽：大阪フィルハーモニー交響楽団



貴志康一作品集

指揮／朝比奈 隆

ソプラノ／樋本 栄

ヴァイオリン／辻 久子

管弦楽／大阪フィルハーモニー交響楽団

A面 ■ 交響組曲「日本スケッチ」から

市場……………8' 35"

夜曲……………4' 24"

■ 歌曲集から

かもめ……………2' 37"

天の原……………3' 00"

赤いかんざし……………5' 05"

かごかき……………2' 27"

B面 ■ ヴァイオリン協奏曲

第1楽章 アレグロ・モルト……………13' 40"

第2楽章 クアジ・アンダンテ……………8' 00"

第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェ……………9' 57"

◆ 貴志康一の音楽

第2次大戦後、わが国の経済が復興し、世界の経済大国といわれるようになると、それに歩調を合わせるように国内の公共施設が整備されることになった。さらに大学・高校などにも立派な講堂やホールが競うように建てられたが、1978年6月30日に竣工記念式典を行った甲南中学校・高等学校の場合は、いささかユニークなケースといえる。というのは新設された講堂の一角には「長谷川三郎記念ギャラリー」と「貴志康一記念室」が設けられ、竣工記念式典のあと「貴志康一(1909-1937)作品演奏会」が開かれたためである。

このレコードはその当日の演奏を収録したもののだが、記念室には貴志氏の遺した楽譜・遺品のほとんどすべてが収蔵され、演奏会の曲もそのなかから選んで行われた。これは貴志康一の代表作が第2次大戦後はじめて公衆の前で演奏された最初の演奏会として記憶される必要がある。貴志康一という名前だけは一部の人たちに知られていたが、その業績については、わが国では演奏家としての活動がいまも伝えられる半面、作曲家としては歌曲とヴァイオリン独奏曲の若干が紹介されたに過ぎなかったようである。貴志康一とはいったいどのような人物なのか。

貴志康一は昭和12年にわずか28才の若さで急逝した彗星のような音楽家だった。しかし彼は、わが国の洋楽興隆期にドイツと日本を往復し、当時としては抜群の音楽的能力をもって、目の覚めるようにはなやかな活動で世人を驚嘆させた天才といえる。彼は明治42年大阪で生まれ、甲南小学校から高校高等科へと進んだ。11才からヴァイオリンを学び、大正15年、甲南高等学校を2年で中退してジュネーブの国立音楽院に入学したが、昭和3年、同校を首席で卒業した。彼はいったん帰国したのち、ふたたび渡欧してベルリンで名教師とされたカール・フレッシュに師事、昭和4年に帰国して近衛秀麿の伴奏でヴァイオリニストとして活躍した。

やがて指揮者となることを志望した彼は三たび渡欧してベルリンで巨匠フルトヴェングラーに師事した。おそらく管弦楽曲の大部分はこの時代に作曲されたのであろう。貴志康一はベルリン・フィルハーモニーを指揮してそれらの作品を発表し、連続的にテレフンケン・レコードにも録音してベルリンで天才的な日本人音楽家としての名声を高めた。貴志康一が、みずみずしい感覚と柔軟な音楽性で、ベルリン・フィルを縦横に操る精彩にみちた名演は、いまも当時のレコードできくことができる。

したがって26才で帰国してからは新交響楽団(現在のNHK交響楽団)を暗譜で指揮し、ベートーヴェンの「第9」などを演奏して各地で絶賛を博したのも当然である。彼が2年後に急逝しなければ、指揮と作曲の両分野で、さらにすぐれた仕事をしたことは疑う余地がないが、残された作品だけでも、わが国の作曲史上、重要な存在といわなければならない。とくに管弦楽曲の手法は、当時としても新鮮である。おそらくヨーロッパで当時の新音楽に触れ、そうしたものの影響

を民族主義的な作風に融合させたためであろう。

貴志氏はベルリンで音楽を勉強しながら、同時に日本文化の広範な紹介にも力をつくした。多くの歌曲を日本語のままドイツの歌手に歌わせ、管弦楽曲においても日本古来の旋法やリズムを西欧的な手法に結合させた。あざやかなオーケストレーションに若干の異国趣味を混入させたのも、はるかな故国日本をドイツ人にわかりやすく紹介する目的があったためだろう。大胆な和声や転調の効果、写実的なイデオロムもまた同じ趣旨から生まれたものと思う。歌曲の場合、大多数の歌詞を自作したのも興味深い。

このような作品群がいままで知られなかったのはふしぎなことである。しかし貴志氏の没後、わが国が日中戦争から第2次世界大戦に及ぶ破滅の道を進み、戦後は音楽の潮流が一変したことを考えれば、無理もないことといえる。もっともこの数年来、改めて先駆者たちの業績が見直され、再評価されるゆとりが出てきた。そして貴志氏の没後40年間、ご母堂やご令妹によって大切に保存されてきた楽譜や遺稿が、母校の一室に収められたのである。貴志康一の研究と再評価はいまはじまったばかりといえる。

◆ 曲目ノート

交響組曲「日本スケッチ」より「市場」

この曲は第2次大戦前、「日本組曲」中の「道頓堀」とともに、わが国でレコードが発売され、貴志康一の管弦楽曲では比較的良好に知られた作品である。「日本スケッチ」組曲は4曲からなるが、ほかの貴志康一作品と同様、創作年代は明らかでない。おそらく昭和5~10年の第3次渡欧中の作品であろうが、「市場」は標題的な内容をもち、ポ・プリ風に書かれている。

曲は日本古謡風の旋律による市場の喧噪と活気の様子にはじまる。やがて人波が絶える時刻となったのか倦怠にも似た気分が漂うが、ここでは都会の憂うつとでもいえる旋律がいくつか出てくる。しかしふたたび冒頭の旋律が対位的に扱われて再現、それも人波の喧噪に溶け込んで、市場は本来のアレグロの活気を取り戻して終わる。

交響組曲「日本スケッチ」より「夜曲」

「日本スケッチ」第2曲。この曲では昭和3年につくられた歌曲「君恋し」(時雨音羽詩・佐々紅華曲)の一節が冒頭に引用されている。しかしそれはしばらくすると古謡風の旋律に移り、つづいていくつかの旋律が次々と登場、あるいは再現したのちふたたび「君恋し」の引用に戻って終わる。

独唱と管弦楽のための歌曲集

貴志康一は11曲のピアノ伴奏付歌曲を残したが、その多くが1934年にベルリンのC. A. シャリエ社から出版されている。管弦楽伴奏の編曲版もそれに基づいてつくられており、ここでは4曲が管弦楽伴奏によって歌われている。そのうち「天の原」以外は自作の歌詞によるが、「かもめ」はもとより、いずれも日本情緒あふ

れるオリジナリティに富んだ作品である。

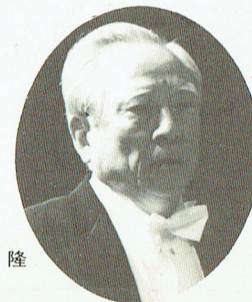
貴志康一の歌曲は、伴奏部の色彩ゆたかな管弦楽法や和声進行のおもしろさがきわめて個性的で、「天の原」には雅楽から啓示されたような和声的手法がみられる。「赤いかんざし」の叙情のゆたかさや間奏の大胆な発想も効果的で、この作曲者の歌曲ではもっとも有名になった「かごかき」も、リズム的な楽想の内部から漂う情感の濃密さや計算されつくした伴奏のからみが、またみごとというほかはない。

ヴァイオリン協奏曲

この曲は、古典派とロマン派の協奏曲の系譜を受け継いだ3楽章の作品で、貴志康一の唯一のコンチェルトである。作曲年代と経緯についてはこれも不明だが、第3次渡欧中の1934年に、名ヴァイオリニスト、クーレンキャンプの独奏、作曲家指揮によって第1楽章のみベルリンで演奏された記録がある。日本初演も第1楽章だけが辻久子独奏、尾高尚忠指揮で昭和16/17年ごろ行われたという。したがって全曲初演はこのレコードに収録された演奏ということになる。

曲はハチャトゥリアンの「ヴァイオリン協奏曲(1940)」の先駆的作品ともいえる。第1楽章アレグロ(4/4拍子)はソナタ形式で、管弦楽の導入につづいて二つの主題が経過句をはさんで提示される。これらはそれぞれが発展部を伴うが、第2主題は第1主題から導き出された感じが強く、そのためか技巧的な小結尾のあとの展開部では、二つの主題のほか新しい主題が冒頭に用いられる。再現部は第1主題再現にはじまり、名技的なカデンツァを経てさらに二つの主題再現と、ホ長調のコーダにつづく。なお、この第1楽章と終楽章には「祭礼囃子」を意味するドイツ語が表示されている。

第2楽章クアジ・アンダンテ(4/4拍子)は、木管とハープによる日本情緒ゆたかな主題にはじまる。ヴァイオリン独奏がアイングング付で加わり、中間部ではダブルストップによる新しい旋律が出る。これは同じ作曲者の「竹取物語」にも似ている。コーダの前にカデンツァがある。第3楽章モルト・ヴィヴァーチェ(3/4拍子)は自由なロンド・ソナタ風の終曲。冒頭の序奏は第1楽章第1主題の変型されたものらしく、ヴァイオリン独奏は技巧的な走句をこなさねばならない。中間部に副主題をおき、おおよそ対照形に各部が配置されているが、ここでも終結のすこし前にカデンツァが挿入される。



朝比奈 隆

◆ 演奏者について

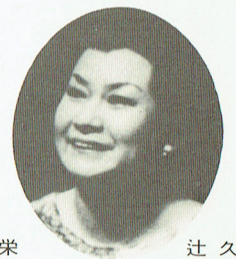
わが国指揮界の長老、朝比奈隆は、京大在学中からメッテル、モギレフスキー、クロイツァーらに師事、昭和22年に関西交響楽団を創立した。以来今日までわが国指揮界の第一線に活躍し、現在も大阪フィルハーモニー交響楽団常任指揮者・音楽監督として大阪楽壇の支柱的存在となっている。また昭和30年より毎年渡欧して、ベルリン・フィルほかヨーロッパ各国の楽団を指揮し、欧米でもわが国の指揮界の重鎮として知られる。朝比奈隆は昭和4年より貴志康一氏と親交を結び、指揮者としても現在まで貴志作品をしばしば手がけてきた。

ソプラノ歌手、樋本栄は、東京音楽学校卒業後、西ドイツに留学、さらにウィースバーデン歌劇場などに出演した。関西歌劇団のプリマとしておびただしいオペラの主役を演じるかわら、日本歌曲やリート、オラトリオなど広い分野で精力的な活動をつけているが、その舞台経験では彼女の右に出る歌手はすくない。まさに大阪を代表する名歌手といえる。

ヴァイオリニストの辻久子は、もう40数年もわが国女流演奏家の第一人者として活躍中である。昭和13年に音楽コンクール第1位の栄冠に輝いて以来、ヴァイオリン一筋にかけた人生だったが、その間、常に新しいレパートリーに取り組み、未曾有の境地をひらいた。一時はヨーロッパでも盛んに演奏したが、今回の貴志康一「ヴァイオリン協奏曲」は、少女時代から全曲演奏の夢をもっていたという。(小石忠男)



樋本 栄



辻 久子

大阪フィルハーモニー交響楽団



1978年6月30日(金) 甲南中学・高等学校講堂における記念演奏会にて収録。録音ディレクター：平澤佳男